

特集

【冬といえば】

『こびととくつや』

ジョセフ

今年も12月に入り、冬の到来のはじまりとなりました。冬と言って思い浮かぶものの一つにクリスマスがありますが、クリスマスといえばなぜかグリム童話の「こびととくつや」を思い出します。内容をご存じの方も多いかと思いますが、要約すると、クリスマス前のある日、靴屋のおじさんが夜に靴の皮を作業台に置いたままにしておくと、次の日の朝には靴が出来上がっているというお話です。その理由は、夜中にこびと達が靴を作ってくれるからであり、そのお礼として服などをプレゼントされたこびと達は、その後、現れなくなったとして物語は終了します。

ところで、夜に机に積み上がった仕事が次の日の朝に出来上がっているとしたら、それはもうHAPPYです。しかしながら、このようなことは実現可能なのでしょうか？これに関連する話として、たとえばアメリカの企業が行っている、インドとの時差を利用した開発体制があります。アメリカとインドとは昼夜が逆ですので、昼間にアメリカにいる人が行った作業の続きを、夜間はインドにいる人が行うというものです。これがうまく機能すれば24時間体制での開発が可能となり、こびととくつやのようなシステムが実現するようにも思われます。このような手法は、かつて半導体回路設計などの分野でもよく行われ、昨今はソフトウェア開発の分野でもよく行われるそうです。

しかしながら、同物語をよく読むと、こびと達が靴を作っている日は、おじさんは靴を作っていないようです。逆に、こびと達が靴を作らない日（こびと達が来る前およびいなくなった後）は、おじさんは靴を作るようです。すなわち、働き手がおじさんだけでなくこびと達を含めて十分にいるのであれば、それによって24時間体制で仕事するのではなく、むしろワークシェアリングによって各人の仕事時間を減らすという選択肢もあり得るということが教訓として得られます。

以上のおりですので、冬といえば、こびととくつやを思い出す時期でもあり、また、同物語から、ワークスタイルの多様性について改めて考えさせられる時期でもあります。

フランスの冬の定番「ラクレット」

ラクレッター

日本の冬の定番料理といえば、最初に思い浮かぶのはやはり鍋でしょうか。食卓を囲み、会話を楽しみながら皆で熱々の鍋をつつく。その光景を思い浮かべるだけで、何だかほっこりした気持ちになります。

ところで、それに似たものがフランスにもあります。最近日本でも浸透しつつあるチーズ料理「ラクレット」です。ラクレットとは、半月状のラクレットチーズの表面を専用オープンで溶かし、とろ〜り溶けたチーズを熱々の茹でたジャガイモにかけて食べるスイス発祥の郷土料理です。400年の歴史があり、フランス人の友人曰く、フランス人は冬になると無性にラクレットを食べたくなるそうです。

フランス人主催の夕食やパーティーに呼ばれると、必ずと言っていい程、チーズとワインは常備されています。個人的には、日本人にとっての「寿司と日本酒」より、フランス人にとっての「チーズとワイン」の方がより普段の生活に近いのではないかと思います。

去年の冬、ちょうどクリスマスの頃、フランス人の友人が家でラクレットを振る舞ってくれました。薄くスライスしたラクレットを専用のフライパンでとろとろにして、ジャガイモやハムにかけて食べます。ラクレットやハムには程よく塩気もあるので白ワインと非常に合います。更に、胸焼け防止のピクルスも横に添えられているので、もうこれ以上は食べられないと思っても、つつい手が伸びてしまいます。最初は「これってカロリー凄いいことになっているのでは?」と遠慮気味に食べていても、後半には「コート着ちゃえば、皆同じか!」と開き直って、ばくばく食べていました。

美味しいものを食べながら、家族や友人と楽しい時間を共有する。それは当たり前かもしれませんが、全世界共通なんだなぁと改めて感じます。ということで、今年の冬はラクレットとワインでフランス風な冬を体験してみるのはいかがでしょうか。



【冬といえば】

冬といえば南の国

旅好き

私は寒いのが苦手かつ海が好きのため、毎年冬になると暖かい南の国へ旅行に行きます。初めて行った南の国は、大学1年生の時に短期留学で訪れた夏のニュージーランドでした。気候が暖かく、豊かな自然に囲まれ、夜には満点の星空を見ることが出来る、とても素敵な国でした。また、現地の人がとても優しく温かく、時間の流れがゆったりしていて、のんびり屋の私にはぴったりだなと感じたのを覚えています。すっかり南の国の虜になり、その後もサイパン、フィリピン、フロリダ、パラオ、メキシコ、ハワイなどの国や地域へダイビングや観光をしに行ってきました。

南の国に限らない話ですが、海外に行くと、良くも悪くも日本との違いを実感します。私は、きれいに観光地化され整備されている場所よりも、その地域本来の生活が見える場所に行くのが好きです。不便なことが多く、怖いと感じることも時にはありますが、逆に普段の都会の生活では感じる事ができないことを経験でき、面白いと思います。地元の人々が海沿いでBBQをやっている近くを歩いていると「一緒にどう？」と声をかけてくれたり、道端で工事中のおじさんが「元気かい？」と笑顔で声をかけてくれたり、人々がとてもフレンドリーで、自然と温かい気持ちになります。日本にいるとなかなかこういった場面は無いように思います。日本の冬は寒いですが、南の国へ行って、なんだかいつも温かい気持ちになって帰ってきます。

冬の季節感を全く感じられない話になりましたが、まだまだ行ってみたい南の国が沢山あるので、これからも心も体も温まりに、冬に旅行に行きたいと思います。



◀ ハイビスカス



パラオのビーチ▶

神戸の冬

H.K

私が生まれ育った神戸では、12月の寒空の下、美しい光のアーチが街を彩ります。〈神戸ルミナリエ〉と名付けられたその光の祭典は、1995年に発生した阪神大震災を契機に、鎮魂と街の復興を祈念して始まったイルミネーション事業です。毎年12月上旬(2014年度は12月4日～15日まで)になると、地元の人々や多くの観光客で街が賑わいます。震災の記憶を語り継ぎ、希望の光として開催され続けてきた神戸ルミナリエも今年で20回目の開催となり、当時生まれた子供たちが成人するまでの歳月が流れたと考えると、とても感慨深い気持ちになります。予算や環境への配慮などの諸々の事情で、「今年で終わりになるかもしれない」という話が毎年出るものの、多くの人の募金や呼びかけで何とか続けてきました。震災の記憶を語り継ぐという街の意志がそこにある限り、形は変わっても、あの灯が消えることはないだろうと、皆が感じているような気がします。

高校時代はカップルがクリスマスデートとしてイルミネーションを観に行くのが定番コースでした。私は生憎そういつか機会に恵まれず、羨ましく思いながらもそれを表に出さないように必死でしたが、そういった甘酸っぱい記憶も、あの光のアーチを見ると思い出されます。

震災の記憶、青春の記憶、生まれ育った故郷の記憶。人々の様々な記憶を呼び起こす神戸ルミナリエは、未来への希望の灯として、今年も神戸の冬を彩ります。災害から立ち直った街に輝くイルミネーションが、これからもずっと続いていくことを願っています。

